OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ベルリン啓蒙主義における「水曜会」の存在について(2)：ニコライおよびクラインの文書より
Author(s)	中, 直一
Citation	ドイツ啓蒙主義研究. 2006, 6, p. 19-28
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/73817
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ベルリン啓蒙主義における「水曜会」の存在について(2)

— ニコライおよびクラインの文書より —

中　直一

1　私人の結社としての水曜会 — ニコライのエンゲル伝(1806)

18世紀後半にベルリンに存在した学者サークル「水曜会」については、本研究プロジェクト前号[1]において指摘したように、会員相互の自由な討論を保障する啓蒙主義的な学術団体としての側面と、逆にその存在を世間に公表しない秘密結社的団体としての側面の二面性があり、残された資料の執筆者のスタンスによって、そのどちらの側面が強調されるか、微妙な差異がある。

本研究プロジェクト前号ではM・メンデルスゾーンに宛てたビースターの書簡、およびニコライ自伝を取りあげたが、本号ではニコライのエンゲル伝およびクライン自伝を取りあげる。

まずニコライのエンゲル伝を考察の対象とする。水曜会メンバーの個人史については、本研究プロジェクト次号以降で取りあげるので、ここではエンゲル(Johann Jakob Engel, 1741-1802)についてごく簡単に述べると、彼はパヒム(Pachim)に生まれた文筆家で、いわゆる「通俗哲学者」(Populärphilosoph)の一人である。ロストク、ビュッツォウおよびライプツィヒで学んだ後、エンゲルは1776年、ベルリンのヨアヒムスタール・ギムナジウム(das Joachimsthalsche Gymnasium)[2]に道徳哲学の教授として赴任した[3]。つまり彼がベルリンに来たのは1776年ということになる。

ベルリンに生まれたニコライによるエンゲル伝には、エンゲルがベルリンに来て以来どのような人士と交流を持ったかということについて、次のような記述がある。

> 「彼は出来るだけ大きな会は避け、そしてまた特に、自分のことを以前から知っている人がいないような会を避けた。もしも彼がそうした会を避けなかったなら、彼はベルリンのあらゆる識者の会で、十分に受け入れられたことであろうし、またそのような場で光彩を放ったことであろう。」(S.29) [4]

ここで述べられていることは、エンゲルがごく親しい友人同士の会は別として、見知らぬ人間同士が集まる様な「大きな会」を避けた、ということである。このようなエンゲルは、水曜会には属していたのであるから、このことから逆に、水曜会がごく内輪の知人同士・友人同士の会であったことが伺える。

ニコライの言葉の中には「あらゆる識者の会で」(in allen gebildeten Gesellschaften)という表現が登場する。上に述べたようにエンゲルは大きな会には参加しなかったのであるから、当然の事なが

らアカデミーのような大規模な「識者の会」には参加しなかった。つまりそのような大規模な会に参加しなかったエンゲルは、当然の事ながらそのような会では「十分に受け入れられ」また「光彩を放った」ことはなかったが、逆に言うと、内輪の会合においてはエンゲルが自己の持つ才能を十分に発揮したとニコライが評価していたことが判る。

それではエンゲルが実際にベルリンで交際を持ったのは、どのような人物たちであったのだろうか。この点について、ニコライは次のように報告している。

> 「彼は、信頼を置く友人たちの小さなサークルの中で生きることを最も好んだ。その友人たちとは、主に高貴なる人物たちであった。すなわち Moses Mendelssohn, Teller, Merian, Eberhard, Wlömer, Serber, Klein, Menken, Zöllner, Meierotto, David Friedländer, Biester, Herz および Sischer であった。」(S.29f.)

この氏名リストを、本研究プロジェクト前号で紹介した水曜会メンバーのリストと対比してみれば、興味深いことが判る。メンデルスゾーン宛のビースターの書簡に付された書類に挙げられていた水曜会メンバーは Zöllner, Schmid, Mendelssohn, Dietrich, Spalding, Engel, Nicolai, Teller, Möhsen, Gedike, Struensee, Dohm, Gebhard, Vlömer, Siebman, v. Irwing, v. Beneke, Selle, Biester の19名であったが[5]、このリストにはニコライおよびエンゲルが含まれるので、これを除外すると17名になる。一方エンゲルの友人としてニコライが名前を挙げているのは14名だが、これを上記の17名と対比すると、5名 (Moses Mendelssohn, Teller, Wlömer[6], Zöllner, Biester) が重なる。メンデルスゾーン宛のビースターの書簡に付された書類には Klein の名前がないが、本論文次節において見るようにクラインは水曜会のメンバーであったから、ニコライが報告するところのエンゲルの友人リストにあるクラインを算入すると、6名になる。

エンゲル伝に関し筆者がここまで紹介してきた部分は、あくまでもエンゲルの交友範囲をニコライが述べている箇所であって、水曜会そのものをニコライが論じているわけではない。だがこうしたエンゲルの交友範囲を紹介した箇所のすぐ後の箇所で、ニコライは水曜会においてエンゲルと出会ったことを述べている。つまりニコライはエンゲルの交際範囲が決して広くなかったことを述べ、さらにエンゲルが実際にベルリンで交際を持った人物名を挙げた後すぐに、エンゲルとニコライが水曜会という会において出会ったことを述べているのである。

本研究プロジェクト前号で述べたように、ニコライは 1799 の自伝において、水曜会の活動についてかなり詳細に紹介する一方、そのメンバーについてはほとんど情報を与えなかった。1806 年のエンゲル伝においてニコライは、水曜会メンバーを直接紹介するということは避けているものの、エンゲルの友人の名前は挙げ、その名前が結果的には、水曜会メンバーと若干重複しているのである。

このようにベルリンにおけるエンゲルの交際範囲について述べた後、ニコライはエンゲルとの出会いについて次のように述べている。

「私は1764年から1798年までの14年の間、私人の学者の会で彼と一緒になった。その会はどのような時でも2週間に1度集まりがあり、またそのメンバーは優れた洞察力を持つ人々であった。」(S.30)

まず注意すべきは、ここで「水曜会」という名称が用いられず、単に「私人の学者の会」(eine[r] gelehrte[n] Gesellschaft von Privatpersonen)とのみ記されている、という点である。この点は、本研究プロジェクト前号で論じたビースターの書簡(M・メンデルスゾーン宛)、およびニコライ自伝において「水曜会」という名称が紹介されず、単に「学者の会」とのみ記されていたことと軌を一にする[7]。ただしここでは、ことさら「私人の」という語句が付加されていることが注目される。つまり水曜会のメンバーにはプロイセンの国家官僚ないしそれに近い人物も含まれていたのだが、そうした人物たちが私人の資格でこの会に参加していたことが、「私人の」という修飾語句から伺えるのである。

上の引用文においては、水曜会が存在していた時期についても言及されているが、「1764年から1798年までの14年の間」という記述には、明らかに錯誤ないし誤記が含まれる。「1764年から1798年まで」が正しいとすれば、14年間でなくて34年間でなければ計算が合わない。

本研究プロジェクト前号で述べたようにニコライ自伝においては、水曜会の創立が1783年であると明記され[8]、またその会が14年間存続したとされている[9]。同じニコライが書いた文書であるニコライ自伝とエンゲル伝において、「14年間」という記述のみ共通し、会の創設時期については、ニコライ自伝は1783年とし、エンゲル伝は1764年とする。一方、会の解散時期については、ニコライ自伝では明記されず、エンゲル伝では1798年とされる。

まず明らかに誤記であると思われる点から検討する。本研究プロジェクト前号で紹介したように、M・メンデルスゾーンに宛てた1783年の書簡で、ビースターは会の結成を「最近」としており[10]、そのことから考えてエンゲル伝における1764年という水曜会創設の年号は「1784年」の誤植であろうという推測が、まずは成り立つ。1784年から1798年ならば、期間もちょうど14年となる(もっとも、水曜会が1784年の早い時期に創設され1798年の遅い時期に解散したとすれば、実質的には15年に近くなるが、議論を煩瑣にすることを避けるために、以下の論述においては端数の月は切り捨てて計算することとする)。

会の創設を1784年とするこの推測は、ニコライ自伝における記述、すなわち会の創設を1783年とする記述と年代が1年ずれる。もしもニコライ自伝における1783年創設という記述が正しいのだとすると、それから14年後は1797年となり、今度はエンゲル伝における水曜会解散を「1798年」とする記述と矛盾する。他方、ニコライ自伝における「1783年」創設が正しく、またエンゲル伝における「1798年」解散も正しいとすると、会の存続は15年間となり、ニコライ自伝及びエンゲル伝の両方で「14年間」としている点と矛盾する。

ニコライ自身のふたつの記述(ニコライ自伝とエンゲル伝)の両方に誤記ないし誤植があると覚しき以上は、そのどれを基準にとっても全てを整合的に解釈することは出来ない。それゆえここでは、あり得べき3つの可能性を列挙するに止めたい。(この点については本論文第3節においてもう一度論ずる。)

（1） 水曜会は 1783 年に創設され、1797 年に解散するまで14年間存続した。
（2） 水曜会は 1784 年に創設され、1798 年に解散するまで14年間存続した。
（3） 水曜会は 1783 年に創設され、1798 年に解散するまで15年間存続した。

先に引用したエンゲル伝には、もうひとつ注目すべき記述がある。それはこの会が、「どのような時でも2週間に1度」(in zwey Wochen jederzeit)会合を持った、とする記述である。この点は、ニコライ自伝における「1ヶ月に2度開催」[11]との記述とほぼ一致するが、本研究プロジェクト次号以降で検討するドーム伝（グローナウ執筆）の記述（冬期は月に2度、夏期は月に1度開催されたとする）[12]とは食い違いを見せる。

ニコライのエンゲル伝においては、水曜会についての記述は以上の部分にとどまる。水曜会については、ニコライ自身、本研究プロジェクト前号で紹介した自伝（1799）、本論文本節で取りあげたエンゲル伝（1806）、そして本論文第3節で取りあげるテラー伝（1807）の都合3箇所で論じていて、その記載の量は次第に少なくなる。既発表の文書と重複する記載をなさないという配慮が働く以上は、それは当然のことであろう。われわれとしては、ニコライの3種の文書それぞれに現れた水曜会についての記述を相互補完的に考察し、もしも矛盾する記載があればそれを指摘し、ニコライが記述する文書の中から伺える水曜会の姿を明らかにすることをもって本稿の任としたい。

2 知の饗宴の場としての水曜会 — クライン自伝(1806)

次に取りあげるのは法学者クライン(Ernst Ferdinand Klein, 1744-1810)の自伝である。クラインがプロイセン一般ラント法起草のため、カルマー(Johann Heinrich Casimir von Carmer, 1720-1801)に呼ばれてベルリンに来たのは 1781 年のことであるが、クラインはベルリンに来てどのような人物と交際を持ったかについて、次のように述べている。

> 「ベルリンに来てすぐに、ガルヴェの薦めによって、私は尊敬すべき老人シュパルディングとの学びある交際を得た。Engel, Mendelssohn, Dohm, Selle, Nicolai, v. Irving, Dietrich, Zöllner, Biester、そしてこうした人々に劣らぬくらいに評価すべき学者が、私の友人になった。彼らは Suarez, Wlömer, Struensee およびその他の洞察力ある実業家たちと、ひとつの会を形成していた。ひょっとしたら、そのような会に匹敵するものはかつて無く、また今後も存在しないかもしれない。」(S.53) [13]

ここで挙げられている人物のうち、ガルヴェとシュパルディングを除く12名についてクラインは「一つの会を形成していた」と述べている。すなわちクラインの友人9名およびスアレツ以下の3名が水曜会の会員であったとされるのである（もっとも「水曜会」という名称は示されていないが）。

これらの人名をメンデルスゾーン宛のビースターの書簡に付された書類に挙げられていた水曜

会メンバーと合算して考えると、水曜会のメンバーとして次の人々が参加していたことが判る。

> v. Beneke, Biester, Dietrich, Dohm, Engel, Gebhard, Gedike, v. Irving, Mendelssohn, Möhsen, Nicolai, Schmid, Selle, Siebman, Spalding, Struensee, Suarez, Teller, Wlömer (Vlömer), Zöllner

以上の20名のうち、メンデルスゾーン宛のビースター書簡に付された書類にのみ現れるのは v. Beneke, Gebhard, Gedike, Möhsen, Schmid, Spalding, Teller の7名である。このうちシュパルディングに関しては、クライン自伝においてガルヴェとともに水曜会会員という形での挙げ方になっていないが、水曜会会員名紹介の直前に挙げられていて、解釈の仕方によっては水曜会のメンバーに連なるとも読める。(ただしこの読み方を敷衍すれば、ガルヴェも水曜会会員ということになりかねないので、問題がないわけではない。)クライン自伝にのみ現れるのは Siebman, Suarez の2名である。それ以外の11名すなわち Biester, Dietrich, Dohm, Engel, v. Irving, Mendelssohn, Nicolai, Selle, Struensee, Zöllner, Wlömer (Vlömer)は両文献に共通して登場する。

ここで注意しなければならないのは、ビースターの書簡に付された書類の中に含まれた水曜会メンバーの氏名リストは、1843年に初めて公開された(メンデルスゾーン全集の中に含まれるメンデルスゾーン伝の中に紹介される形で)ということである。すなわち水曜会メンバーの全体像について紹介したのは、1806 年のクライン自伝が初めてである。1799 年のニコライ自伝においてはメンバーの名前はほとんど挙げられず、1806 年のエンゲル伝でも直接水曜会の会員氏名は紹介されていなかったが、クライン自伝においては、公表をはばかるというトーンが全くないままに、水曜会メンバーの氏名が列挙されているのである。

クライン自伝には、水曜会において実際にどのようなことがなされていたのか、ということについて以下のような記述が見られる。

> 「これらの人士の会合においては、いつも一人が、共通の利益になる論文を朗読し、残りの人々がそれについてコメントを述べた。そして当該の論文は引き続き全メンバーに回覧され、メンバーは自分の意見を文章にしてそこに書き入れたのである。論文の回覧が終わった後、論文の著者は、全てのコメントから短い抜粋を作って、集まった人々に周知せしめ、そして彼の講演の末尾において、彼が現時点で他の人々に同意するか、さもなくば自己の最初の意見に固執しなければならない理由を付け加えた。」(S.53f.)

水曜会の会合の主たる営為が、参加者のうち一人が自身の論文を朗読し、それに引き続き残りのメンバーがコメントを述べたことが、上の文章から伺える。この点は本研究プロジェクト前号で検討したニコライ自伝と同じである。だがニコライ自伝における記述と違う面もある。

まず、ニコライ自伝においては水曜会における討論の題材が主にカント哲学から取られていたかのような記述になっていたのに対し[14]、このクライン自伝では「共通の利益になる論文」(einen

gemeinnützigen Aufsatz)が朗読されたと記されている。gemeinnützig を仮に「共通の利益になる」と訳したが、これは「参加メンバーの皆の興味を惹く」という意味に解してよいであろう。すなわちクラインやスアレツといった、プロイセン一般ラント法起草の中心人物をもメンバーとする水曜会においては、ニコライの指摘するように、もっぱらカント哲学について討論がなされたというよりは、もっと幅広く様々なテーマについて論ぜられたことが推測される。

もう一つ相違する点がある。ニコライ自伝では水曜会メンバーが書いた口頭発表原稿が朗読されるのみならず、それ以外の著書(すなわちメンバー以外が書いた一般的著書を含む)が朗読の対象となったことも紹介されていた[15]。それに対しクライン自伝においては、会員の原稿が朗読された事は示されているものの、それ以外の一般著書から朗読がなされたことについて言及されていない。

論文の朗読、およびその後の口頭によるコメントという手順のあと、論文そのものが回覧に供せられ、論を読んだメンバーが自己のコメントを文書化して記した、というクラインの記述は、ビースターがメンデルスゾーンに伝えた水曜会の活動内容と同じである[16]。ただし、ビースターの書簡では、論文がカプセルに入れられて搬送される旨が記されていて、機密保持に意を用いていたことが伺えるのに対し、クライン自伝においてはそのような機密の保持を伺わせる記述は一切ない。すなわちビースターの書簡では、メンバーの安全性に配慮する意味から情報非公開の方針を強調する記載内容になっていたが、クラインの自伝においては、およそ水曜会において情報が非公開であったということは文面からは読み取れないのである。

ビースターの書簡では、水曜会の講演原稿が講演終了後にメンバーの間で回覧されたこと、また各メンバーが自己の評価を付して返却した旨が書かれていた。ニコライ自伝においてはさらに、各メンバーが書いたコメントが、それを回収した原著者によって示された(おそらくは次回の水曜会会合において)旨が書かれていた[17]。クライン自伝でも、そのようなことが書かれているが、さらに、返却されたコメントに対して原著者が反論するなりあるいは同意するなりして自分の立場を再度表明したという、ビースターの書簡およびニコライ伝には盛り込まれていない情報が記されている。これらのことを勘案すると、水曜会における講演が、単に一方的に意見を述べるといった体のものでなく、口頭でも文書面でも、かなり濃密に意見交換を行うというものであったことが伺える。

情報の公開という点に関し、クライン自伝には水曜会と『ベルリン月報』の関係についての情報が盛り込まれている。

> 「この会についてはすでに『ベルリン月報』において報道がなされている。私はここで、この会のメンバーであったことをわが人生最高の幸福であると考えている、ということを付け加えるのみにしよう。この会では、楽しく食卓を囲みながら、知的刺激の多い会話がなされたのである。」(S.54)

M・メンデルスゾーンに水曜会への参加を呼びかけたのは、『ベルリン月報』の編集者であるビースターであった。そのことからも水曜会と『ベルリン月報』の関係が伺えるが、上記の引用文では、

水曜会の活動そのものについて『ベルリン月報』に報道がなされた旨が記されている。クラインの自伝は1806年に発表されたものであり、水曜会が解散した1798年(ないし1797年、ないし1800年)から数年たつ。『ベルリン月報』に水曜会関係の記事が掲載されたのが、はたして水曜会存続中のことであったのか、それとも解散後のことであったのか、クラインの上記の記述からは伺い知ることが出来ない。いずれにせよクライン自伝からは、水曜会の存在について、それを秘匿していたというようなニュアンスは全く感ぜられない。それどころか「楽しく食卓を囲みながら(bey einem fröhlichen Mahle) 知的刺激の多い会話がなされた」という記述から想像されるのは、世間にその存在を秘した秘密結社的会合であるというよりは、文字通り知の饗宴の場としての学者サークルの姿である。

本研究プロジェクト前号において紹介したように、水曜会に関する資料には、水曜会のメンバーが書いた自伝、あるいは水曜会メンバーについての伝記があるが、それ以外に、水曜会における討論の様子をうかがわせる資料がある。クラインの『自由と所有』(1790)は、登場人物が一つのテーマについて様々に自己の意見を述べる、という形式をとった著作だが、この著作は水曜会における討論のあり方をかなり反映したものであると言われる。この著書と水曜会の関係についてクラインは次のように述べている。

> 「まさにこの会が、『自由と所有についての会話——フランス革命を契機に』の登場人物を提供してくれた。フランスで主張されたと考えられているいわゆる人権なるものが、しばしば私たちの討議の対象となった。そして私は、この会の卓越したメンバーそれぞれが、どんな考え方や感じ方をするのかについて知っていたので、彼らの意見を非常に正確に推定することが出来た。それゆえ彼らは、自分たちが会話の場で実際に述べたことを、私が細部に至るまで記憶にとどめていたのだと信じ込んだくらいである。だが実際のところはたいてい、いろいろな点について意見表明を求められたならば彼らが言ったであろうような事柄を、私が書いたに過ぎないのである。そして私はそのような諸々の意見を、自分の立てたプランに従って、自著の中で彼らに語らせたわけなのである。」(S.54f.)

上に述べたように、クラインの『自由と財産』は複数の人間による対話篇という形式で書かれたものである。上記の引用文からは、対話を行う登場人物のモデルが水曜会のメンバーであったこと、また水曜会の会合における討論のテーマとして「人権」が取りあげられたことが判る。すでに何度も繰り返したように、水曜会で取りあげられた論題としてニコライはおもにカント哲学を挙げていたが、法学者クラインは「人権」が水曜会においてしばしば討論の対象となるテーマとなっていたと指摘する。そしてフランス革命勃発の翌年に発表された『自由と財産』は、まさにこうしたフランス的(とされる)人権の問題を主題とするものであった。

クラインの言に従えば、『自由と財産』は水曜会における議論をそのままの形で文字化したものではないものの、あたかも自己の発言が『自由と財産』の中で再現されていると参加メンバーが錯覚するくらいに、この著書は水曜会各メンバーの考え方の特徴を把握した上でそれを架空の対話において文章化したものである。

クラインの自伝に現れた水曜会関係の記述は以上のものである。これらをまとめると、おおよそ次のようになろう。

① 水曜会という名称は示されず、単に「会」とする(ビースターの書簡、ニコライ自伝と共通)。
② 会の参加メンバーの氏名が紹介されている。氏名が示されている点はビースター書簡付随文書と共通するが、公開されることを念頭に置いた文書としては、クラインの文書が初めてである。
③ 会合において参加者のうち1名の原稿が朗読され、それについて他の参加者が口頭でコメントを述べた後、原稿が各メンバーに回覧され、各メンバーはコメントを文書で書き込み、それを原著者に返すことになっていた旨が紹介されている(ニコライ自伝と同じ情報)。
④ 原著者に返却されたコメントについて、原著者がそれに賛同するか賛同できないかについて述べることになっていた旨が紹介されている(クライン自伝で初めて紹介された情報)。
⑤ 会合において論ぜられたテーマについて、参加者各人に共通の興味ある論題が選ばれたことが紹介され、またそうしたテーマの一つとして具体的に「人権」があったことが紹介されている。
⑥ 水曜会と『ベルリン月報』の関係が示されている。
⑦ 会がいつから存在し、いつまで存続したのかということについての具体的な情報は示されていない。
⑧ 全体として会の秘密性あるいは情報の秘匿性を示す文言はクライン自伝には含まれない。

3 あらゆる種類の真理 — ニコライのテラー伝(1807)

神学者テラー(Wilhelm Abraham Teller, 1734-1804)についてのニコライ執筆の伝記にも若干水曜会のついての記載がある。上に述べたようにニコライは自伝及びエンゲル伝において、すでに水曜会について基本的な情報を与えており、3度目となるテラー伝における記述の分量は少ない。だがそこでの記載は、それまでの2つの論述と比較してみると、興味深い内容を含む。

> 「テラーはまた、ベルリンの優れた人士による私人の会のメンバーであった。この会はあらゆる種類の真理を自由に考究するためにのみ連帯するものであって、協調性と気兼ねない雰囲気を保持しつつ 1783 年から 1798 年まで存続した。この種のものとしては類いまれなこの会については、私はすでに他のところで述べたことがある。」(S.27)[18]

まず第一に指摘すべきは、会の存続期間が「1783 年から 1798 年まで」と明記されている点である。本論文第1節において指摘したように、ニコライ自伝およびテラー伝においては水曜会の存続期

間についてそれぞれ記載があるものの、相互に矛盾した内容を含み、結局3つの可能性があるという暫定的結論が得られたが、もしもこのテラー伝における記載が正しいとすると、水曜会は前掲の3つの可能性のうちの第3番である「1783年から1798年まで15年間存続した」が正しい、ということになる。もちろん、最後に書かれたテラー伝が正しいのか、それともここにも何らかの間違いがあるのか、その点については真偽の確認のしようがない。

もうひとつ指摘すべきは、自伝においてカント哲学との連関で水曜会をとらえていたニコライが、このテラー伝では「あらゆる種類の真理を自由に考究する」ということを以て水曜会の任としているという点である。この意味では、ニコライのテラー伝はクライン自伝が示す内容に近い。

本研究プロジェクト前号で筆者はニコライ自伝における水曜会についての記載の特質を5つにまとめた。本論文では、ニコライのエンゲル伝とテラー伝における水曜会についての記載を、この5つの点からニコライ自伝の内容と対比したい。

① 自伝においてニコライは会の名称を示すことなく、単に「学者の会」と記すのみであったが、エンゲル伝およびテラー伝においてもニコライは「水曜会」の名前を挙げていない。

② 自伝では月に2回会合が持たれたことが紹介されていたが、エンゲル伝でも2週間に1度会合が持たれたという、自伝とほぼ同様の内容が記載されている。ただし自伝においては会員の原稿ないし一般著書から朗読がなされたことが指摘されていたが、エンゲル伝およびテラー伝ではそこまで詳しい情報は示されていない。

③ 自伝では講演および討論の題材として、カント哲学が取りあげられたことが強調されていたが、エンゲル伝では討論の題材について特段の言及はなく、テラー伝ではむしろかなり幅広くテーマが選ばれた旨が報告されている。

④ 自伝では会の存在を公表せず、また会員氏名も公表していなかったことが指摘されているが、エンゲル伝およびテラー伝においてはそのような非公開性についての言及はない。

⑤ 自伝では、理性的な討論の場としての水曜会の性格が強調されていた。エンゲル伝およびテラー伝では、そこまでの強調は見られないものの、全体のトーンは自伝と同じであると見なしてよい。

以上、本論文ではニコライが著したエンゲル伝とテラー伝、及びクライン自伝を考察の対象としたが、本研究プロジェクト次号では、これらの文献から10年以上後に書かれたゲッキングのニコライ伝を考察することとする。

---

[1] 「ベルリン啓蒙主義における「水曜会」の存在について(1)—ビースターおよびニコライの文書より——」(大阪大学大学院言語文化研究科『言語文化共同研究プロジェクト2004 ドイツ啓蒙主義研究5』2005年)。

[2] ニコライは1746年から1年、この学校に通っている。

[3] 以上の記述は *Deutsche Biographische Enzyklopädie*, Bd 3, München, New Providence, London u. Paris 1996, S.115 による。

[4] ニコライのエンゲル伝の引用は Nicolai, Friedrich: *Gedächtnißschrift auf Johann Jakob Engel,* Berlin u. Stettin 1806. In: *Friedrich Nicolai Gesammelte Werke*, Bd.14 Hildesheim, Zürich u. New York 1995 により、引用ページを本文中に括弧でくくって示す。

[5] Mendelssohn, Georg Benjamin (Hrsg.): *Moses Mendelssohn's gesammelte Schriften*, Bd.1 Leipzig 1843, S.30.

[6] 本稿ではニコライのエンゲル伝における Wlömer とメンデルスゾーン宛のビースターの書簡に付された書類に登場する Vlömer は同一人物であると見なしておく。この点については、現在調査中である。

[7] Mendelssohn, Georg Benjamin (Hrsg.): *Moses Mendelssohn's gesammelte Schriften*, Bd.1 Leipzig 1843, S.30 および Nicolai, Friedrich: *Ueber meine gelehrte Bildung, über meine Kenntniß der kritischen Philosophie,* Berlin u. Stettin 1799. In: *Friedrich Nicolai Gesammelte Werke*, Bd.1,2 Hildesheim, Zürich, New York 1997, S.48.

[8] Nicolai, *Ueber meine gelehrte Bildung*...S.64.

[9] Nicolai, *Ueber meine gelehrte Bildung*... S.66.

[10] G.B. Mendelssohn (Hrsg.), a.a.O. S.30.

[11] Nicolai, *Ueber meine gelehrte Bildung*.... S.65.

[12] Gronau, Wilhelm: *Christian Wilhelm von Dohm nach seinem Wollen und Handeln*, Lemgo 1824, S.122.

[13] クライン自伝の引用は Klein, Ernst Ferdinand, *(Autobiographie)*, In: Lowe, Siegfried Michael (Hrsg.), *Bildnisse jetztlebender Berliner Gelehrten mit ihren Selbstbiographieen*, 2. Sammlung, Berlin u. Leipzig 1806 により、引用ページを本文中に括弧でくくって示す。なおこの文献を Autobiobraphie と称することについては、本研究プロジェクト前号所収の拙論15ページの注9を参照。

[14] Nicolai, *Ueber meine gelehrte Bildung*.... S. 48 u. S.65.

[15] Nicolai, *Ueber meine gelehrte Bildung*.... S.65.

[16] G.B. Mendelssohn (Hrsg.), a.a.O. S.30

[17] Nicolai, *Ueber meine gelehrte Bildung*.... S.65.

[18] ニコライのテラー伝の引用は Nicolai, Friedrich: *Gedächtnißschrift auf Dr. Wilhelm Abraham Teller*, Berlin u. Stettin 1807. In: *Friedrich Nicolai Gesammelte Werke*, Bd.14 Hildesheim, Zürich, New York 1995. により、引用ページを本文中に括弧でくくって示す。